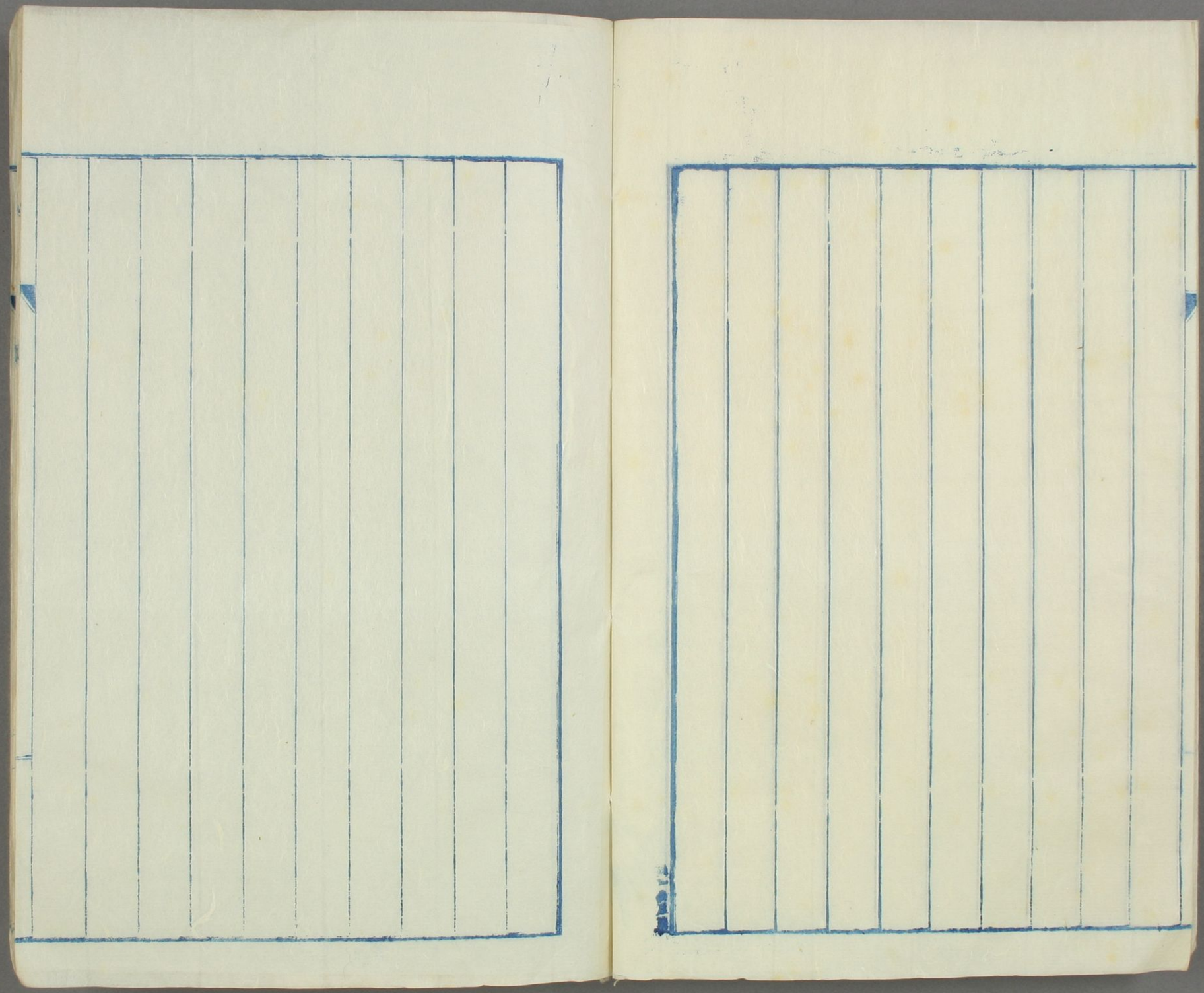
負暄錄

附錄

特別
イ
1919
111

38- 8917



176395

結核征伐（一）

佐竹音次郎

○人類を滅盡せんとする兇敵

▲偉人名士朋友知人　此の十數年間に於て、吾吾が尊敬する所の偉人名士の、肺病の爲に命を取られたのが何人あるか、今日現に命を取られ懸つて居るのが何人あるか、又た吾々の親愛する所の朋友知人であつて、肺病に取殺されたものは何程あるか、今現に惱まされて居るのが何程あるか、試みに指折り數へて見たなれば、ナカ〳〵少ない事でない

▲刺客間諜の徘徊　今假りに外國から刺客間諜が入り込んで、斯く多くの偉人名士を暗殺して居るとしたらドウデあろうか、又た惡獸毒蛇が出沒して、都會と云はず田舍と云はず、斯く多くの知己朋友を取り啖らうものとしたらどうであろうか、恐らくは上下搖しなべて日夜安き心はなく、殆んど寢食を安んぜぬに違ひない、明日とも云はずに全國津々浦々まで戒嚴令が布かれて、大搜索大征伐が始まるに違ひない、是れは復讐の意味から云ふても、自衛の意味から云ふても是非默々に付する譯には行くまい

▲毎年十萬人を斃す　肺病の人類を害することの恐るべきものであることは、ナカ〳〵刺客や惡獸どころの騷ぎでない、歐米では總ての死者の中の七分の一は肺病であると云ふことである日本の死亡人員一ヶ年（三十二年）九十二萬七千人に對すると、十三萬二千人となる、現に肺病として死亡届が出たものゝみで、七萬五千二百二十六人ある、（三十二年）實際は肺病でありながら肺病と名を付けられずに死ぬるのがナカナカ多いから、肺病に斃れるのが正味十萬人は確かである、即ち年々日本の同胞は十萬人づゝ此の魔神の祭壇に犧牲となるのである

○八種傳染病と肺病　世人に虎列刺を恐れぬものはない、ペストを恐れぬものはない、赤痢、痘瘡、實布テリヤ、發疹チブス、腸チブス、猩紅熱を恐れぬものはない、是等所謂八種傳染病は傳染病中の急激なものであつて、恐るべきは勿論であるが、是れは待てしばしがないから、骨を惜まず金も惜まず必死になつて、豫防撲滅をやるものじやから、存外早く退治してしまひ、其の死者の數も割合に多くない、之れが爲めに死ぬるものは、マア三萬七千人（三十二年）から二萬一千人（三十三年）位の所である、肺病に比べたなら漸く二三割に過ぎぬ

▲人類併呑主義　肺病は醫者の方では肺結核と云ふが、此の結核は一時の流行に止まらぬ、寒くても暑くてもやつて居る、又た文明人でも野蠻人でも、何づこ如何なる所でも行はれて居ぬ所はない、ツマリ人類開闢の古昔から人類に仇をして居る、世界中では幾百萬人が年々殺されるソモ人類は一番初めには猛獸を敵として戰ふた次ぎには野蠻人を敵として戰ひ、次ぎは異人種と戰ふたが、是からの人類は全く此の結核を敵として戰はねばならぬ、グヅ〳〵して居ると結核の爲めに人類は滅亡することになる、露西亞の世界併呑主義は恐れるには足らぬが、結核の人類併呑主義は眞正に恐れねばならぬ

○非常なる蔓延力　日本ばかりで十萬人づゝ死ぬる、是さへ非常な無慙なことであるが、尙ほ結核は此上にも年一年に增加しつゝある、シカモ非常の速力で增加しつゝある、ソレハ結核死亡數の全死亡數に對するプロセントを擧げて見たら分かる、即ち明治十九年——同三十一年の間、年々プロセントの足取と云ふものが、初めて三・八でソレから四・八——五・二——五・八——五・六——六・六——六・五——六・三——六・八——六・九——七・四——八・一である、僅か十三年間で割合が二倍强に殖へて居る、死亡數が倍になれば患者も倍になる譯じや、今日實際患者が百萬人あるとすれば、十三年先きには二百萬人、モ一ッ次ぎの十三年目には四百萬人となる勘定である、日本の人口は年々四五十萬づゝ殖ゑるはよいが、此の殖ゑる丈けは皆肺病患者と云ふことになる

結核征伐（三）

佐竹音次郎

○人体細胞と結核菌

▲菌兵の体質と壽命　結核を一つの軍團と見たならば、結核菌は其の兵卒である、扨て此の菌兵といふはドンナものかと云ふと、棒形で少し彎曲して居るから、桿狀菌と稱へて外の微菌と區別する、何のことはなく蠶の蟻蚕のやうで小さいものである、其の大きさはどの位あるかと云ふと、一匹ヅゝ縱隊にすると大きいのなら一萬匹小さいのは二萬匹でチョウド日本曲尺の一分といふ長さになる、五百倍以上の顯微鏡に照らさぬと見ることが出來ぬ、之れを搜索する醫師は士官の双眼鏡と同じく顯微鏡を力と憑むのである、其の皮膜はなか〳〵丈夫に出來て居つて、外物に對する抗抵力も强大であつて大抵の障碍には打ち勝つ力がある、人体以外に居つても大約三ヶ月は壽命を保つて居り、適當な營養物に出會ふと云ふと、忽ちに蕃殖するのである就中人体の体溫濕度は彼れ菌體の蕃殖に最も適當である

▲同類蕃殖の模樣　菌體の蕃殖するには通例分裂作用に因るもので、一ッが二ッになり二ッが四ッになるのである、適當の場所を得ると云ふと、忽ちに此の分裂作用を起こして、瞬時に同類を殖やすのである、チョウド孫悟空が手不足の時には、自分の體軀から毛一本を引拔いてフット吹くときは、忽ちに別に一個同形の孫悟空が顯はれると略ぼ同例である、又た菌兵が種々の毒物に逢ふたり寒熱に逢ふて生存が出來なくなつて死ぬる時にも、一時に種が盡きぬ樣に其の體内に卵のやうなものがあつて、之れ丈けは殘して死ぬる、其卵否な種子は芽胞と名づけてあつて、是れは又た其の構造が菌體よりも一層堅硬に出來て居つて、石炭酸を振りかけられても熱湯にウデられても、親の菌兵は息が絶へても、是れ丈けは容易に死なぬ、ジャから消毒といふ事をする場合には、餘程丁寧にせぬといふと、此の卵子は生き殘つて或は泥土の中に或は塵芥の中に潛むで時節を待つのである、ソレが一朝適當の榮養物に出會ふといふと、忽ちに發育を遂げて、菌氏の後を繼ぎ一人前の立派な菌兵となつて、更らに同類を殖やすのである

▲如何に人体を襲擊するか　扨て此の菌兵が人体を襲擊するは、どうするかと云ふに、主もに鼻孔口腔を經てからに、内城の正廳とも云ふべき肺胞内に達するのである、ソシテ其の氣管支や肺の實質に喰ひ入つたら、最早彼等の成効と云つて宜ろしい、其中ち又た皮膚の創傷より喰ひ込むもあり、食物と共に食道に這入つて腸に占據するものもある、皮膚を侵したのは狼瘡といふ容易に癒へぬ瘡となる、食道を侵したのは腸結核となる、ソシテ肺を侵したのが肺結核となつて忌まはしき肺癆の病となるのである

▲菌兵の金城湯池　ソレで肺癆は、人類に取つては極めて難儀な病であるが、菌兵に取つては營養といひ、溫度濕度の工合といひ、申分ない好殖民地である、ソレデ一たびコヽに占據するといふと、之を金城湯池として大に同類を殖やし、更らに間がな隙がな他の人体を襲擊せんと

東京 樣屋製

企つるのである、外部の皮膚や、手足にてもあることなら、之を切つて棄てゝも善いが、肺と來て居つては、殆んど術の以て攻ひべきなしといふ有樣である、獅子心中の蟲といふことがあるが、かゝる狀況を指した言葉であろう

▲氈毛上皮の拿捕　此等の菌兵は何故に人体に大害を及ぼすかと云ふと、菌体其の物が既に毒物であるのに、此の菌体が分泌する品物が毒物であつて、人体は此等の中毒によつて全身に病的狀態を來たし、又た局部に故障を起すのである、シカシ菌兵とても肺胞に侵入する迄には難關があつて、容易には侵入することは出來ぬ、第一氣管の上部には、氈毛上皮といふがあつて、恰かも刷毛の如くに細毛を生じて居る、菌兵が空氣に乘じて喉　に闖入しても、氈毛上皮に觸れて忽ちに生擒され、有り合ふ粘液に包まれて口中より追ひ返されるのであつて、大抵の場合には、之から奥には這入り得ぬのである

▲肺の實質を侵すは容易ならず　此等の難關を首尾よく通過して、肺胞内に達したとするも、其の實質に喰ひ入つて、之に占據することは容易の業でない、呼吸器の何れの部分も充分健全にして、一點の異狀がなかつた時には菌兵は如何ともすることが出來ぬ、チョウド皮膚に創傷がなかつた時には微菌が侵す譯に行かぬと同樣である何處を探しても乘入る罅隙がない爲に菌兵は空しく鐵壁の下にウロックのみで營養を取るともならず、其中には人体の生理的作用で他の塵埃と共にサッサと口腔外に投り出されてしまうが若し何所かに惡い處の見付かろうものなら、菌兵は得たり賢しと之から附け入るのである

▲細胞の生活機能　扨て又た人体の分子たる細胞はどうであるかと見るに、細胞は腦髓といふ政府の下に指揮せられる國民であつて億兆相集まつて一の人体を作るので、皆な夫々に役目があつて怠りなく已れの職分を盡して居る、これは菌体よりは大分大形で形狀も扁たいのもあれば、脹らんだのもあり、圓いのもあれば、橢圓のもある、之も奇妙に獨立の生命があつて、己れの任期が濟むと他の新細胞と交代することもあり、又た障碍があつて死むだときにも代りの新細胞が出來る、其の部落々々には血管や淋巴管を通じて營養を供給して行き又た汚物不用物は矢張り此の管によつて運び去られるのである これ等の運搬は管中を往復して居る血球淋巴球の役目である

▲細胞勢力の消長　ツマリ肉といひ、皮といひ臟腑といひ、骨といふのは盡く細胞から成立つたもので、各〻勤務を取つて居るから適當に働かすのは細胞を壯健にする譯で最も宜ろしいが度外れの激動は細胞をして奔命に疲れさせるので細胞を虐待する次第となる、大酒を飲むだり房事を漫りにしたり、其他あらゆる不攝生をするのは、宛かも驕暴な君主が人民から苛稅を取つて珍寶美玉を買入れて見たり、外國と無暗に戰爭をしたり、時ならぬ大土功を興して農業の時季を失はしめたりするのと同樣である、是れを始終やつて居るといふと黎庶其生を聊せず民に榮色ありといふ事になるので、榮養の供給も運搬も其の働が不活潑になり、養榮は足らず惡るいものは溜まつて、細胞は疲れ果てゝしまひ、當りまへの勤務にさへ堪へぬ樣になる、假令ば破損したる古城を弱兵が守つて居ると同じで、隙き間だらけであるから、敵の一卒が乘り入つても之れに抵抗することさへ出來ぬ、全体平素は細胞は種々の外來の障碍に抵抗する性能を持つて居るけれども、斯く疲れ果てゝは何等の働も出來ずして手を束ねて降伏する外はないのである、病氣の中でも結核の如きは斯る場合に多く侵襲するものである、それであるのに驕暴闇愚の君主等は己れの國民が既に此の場合に達して、一部の城塞さへ敵に侵入されて居るのも知らずに、尙ほドシ〳〵苛稅を徵發して不急の土木を續けると同なじく結核に罹つたものは自然に情慾の興奮を亢かめたり、又は其の絶望の爲めに益〻不攝生をやることがある、こうなると殆んど救ふの道がない

結核征伐（四）

佐竹音次郎

結核の遠征及び襲撃

▲菌兵の大輸送　患者の肺が既に結核菌の巢窟となつた時には、社會は之を保護すると同時に之を警戒することを怠つてはならぬ、如何となれば結核は患者を一個の本營として置いて、ソロ〳〵社會に向つて遠征を始じめ、他の人体に向つて襲撃を企つるからである、此等襲撃の消息を心得て置くことは、社會衛生の上に非常の必要の事柄であらう

結核が社會を攻撃せん爲めに、其の本營を離れて遠征の途に上ぼるは、如何なる方法を取るやと云ふに、其の大輸送は主として患者の喀痰に

因るのである、試みに針頭に受けた痰汁の一滴を徑五分位の覆蓋硝子に展ばして之に染色法を施こして置いて、五百倍以上の顯微鏡で見るときは、其の一視野即ち覆蓋硝子面の凡そ十分の一ばかりの圏面内に於いて、微かに云微物を認むることが出來る、是れが結核菌であるが、其の數は僅か一二匹しか居ぬのもあれば、二百三百居るのもあり、千二千數へ切れぬのもある、ガフキー氏は菌の多少に因つて一號より十號迄に區別し病勢階級の標準としてある

▲菌兵の露營と舍營　ソレで此の菌兵を戴せた大輸送器たる痰汁が患者の口頭を放れたときは取りも直さず結核が進軍の途に上つたので、患者が咳嗽の聲を發したときは、之をば進軍の喇叭と思はねばならぬ、痛ましく憐れむべき患者が咳嗽喀痰を爲したるときは、社會は其の痰汁の行衛をシカト監視せねばならぬ、何となれば同情を寄すべき患者の體内より出でしものとは云へ、出た其物は實に人類を滅亡せんとする大兇賊の進擊隊なればなり

此喀痰が若しも道路に放棄されてあつたならば之は兇敵の露營と見做さねばならぬ、此喀痰が若しも停車場や會堂の板間に放棄されてあつたならば、之をば兇敵の舍營と見做さねばならぬ

是等の痰汁が乾燥すると共に其の輕快なる菌兵は塵埃に混じて空氣中に飛揚し、人の吸氣と共に揚々として肺胞内に乘り込むのである

▲恐るべき停車場の空氣　又た屋外と屋内の喀痰は、危險の度に大なる相違のあることを知らねばならぬ、道路にあるものは假令乾燥して飛揚しても、風のまに〳〵吹き散らされて廣濶なる世界にサマヨフのであるし、日光に直射せられるのは結核菌の最も懼るゝ所であつて、凡そ三時間日光に直射せられると死滅するものであるから、存外に危險の度も少ないが、停車場でも家屋の室内でも屋根のある處では此の天然の撲滅法が行はれぬ上に、多數の人が狹まい區域の空氣を吸入して居るから、空氣中の病菌は吸入せぬものが少ない位である、獨逸政府が警察令を發して一般人が地上に痰汁を喀き棄てるのを禁じてあるのも歐洲の都會で公衆集合の場處は勿論、處々に共同痰壺の設けがあるのも全く之が爲めである

▲輕氣球に觀したる敵兵　彼れ醜類が進軍の機會は、獨り喀痰のみでない、高聲の談話、失笑、噴嚏、乾燥等の場合にも、菌兵は唾液の泡沫に混じて空氣中に押し出し、輕氣球とも言ふべき微細なる水泡の輕球に駕して進擊の途に上ぼるのである、彼の輕氣球に駕して巴黎圍城の中を脱したガンベッタの奇計なぞは、菌兵等の慣用手段である、それで患者と對談する時には格別に注意せねばならぬ、隨つて患者自身が他人に對して注意すべきは勿論である、或る學者は三尺を隔てゝ坐を占めたらば、危險がないと云ふも、水泡の飛沫は決して三尺以内に落つると定め難いから、是は安心の出來ぬ說である

▲埋伏と拔騙の菌兵　又た菌兵は時々衾被の襟に潜むで、敵人の到るを待つことがある、旅籠屋に於ては殊に此の患がある、遠行の旅客が終日の行旅に疲れて快よく熟睡すると、菌兵は仕濟したりとソロ〳〵衾被を離れて吸氣に隨つて鼻孔に忍び入るのである

更らに菌兵が其の功名を貪る爲めに、彼等の本隊を離れて拔騙する場合がある、患者の吻頭又は唾液中に在るものが、食事の折に茶碗や箸に附きながら吾人の胃中に入ることである、ソレデ宴會の献酬と云ふことも、隨分危險の大きいもので是非とも廢めてほしいものである

▲接吻と可憐の小兒　接吻は醜類の襲擊に就いて無上の好機會であつて、其の進軍の爲めに一大坦道を與ふるものである、此時は恐く彼等は機逸すべからずとして、忽ち全軍驅足の號令を傳ふるのであろう、シカシ日本人に接吻の禮なきは何よりの仕合せである、が慈母が其の子に食餌を與ふるに當り、己が口中に咬み碎きて與ふることはゞあることであるが、結核に罹つても自分では尚ほ悟つて居ぬのも多いから、一般に危險として止めねばならぬ、慈母の口移しが既に危險であるが、況して性の知れぬ他人でありながら、愛想振りに此等の所作を爲すに至つては、親たるものは猶豫なく之を峻拒せねばならぬ、乳母下婢等を雇入るゝ場合にも嚴に注意せねばならぬ、醫師の鑑定を請ふは最も必要である

結核征伐（五）

佐竹音次郎

結核に對する日本の現狀

▲懸賞論文　明治三十二年の五月に伯林に萬國結核撲滅會議と云ふものが献立つて、ソコには

日本からも留學中の人を出席させたが、評議の末に誰れにも分かり易い通俗的論文を募ることになつた、その懸賞は四千マークで世界から我一と論策を投じたが、結局米國の或るドクトルが當選の月桂冠を得た、此の論文は自ら題して『肺癆を充分に豫防撲滅せんには、賢明なる政府熟錬なる醫師及び智識ある國民の協同を要す』といふ山鳥の尾の長々しい題目を冠らせたが其の云ふ處は有繋に分かり易すく要領を得て居るから、山本海軍大臣は逸早く飜譯さして、海軍に配附をした樣子である、横濱の有志家達も相互に之を頒つたらしい、是等は先づ目下の一般方略とでも云ふのであらう

▲歐羅巴の貧民衛生　處で歐羅巴では結核征伐をやるのに、日本から見ると餘ほど仕易い處がある、戰爭でいふと要塞じやが、是は勞働者保護組合といふがあり、勞働者保險と云ふことがあつて、各團體は結核征伐の本部となつて居るソシテ結核軍の要害根擧と恃のむ貧民窟に向つて、絶へず三十珊の衛生的巨砲を發射して居るのである、殊に英國の如きは世人が知れる如く慈善事業即ち貧民救濟の思想が充滿して居つて日々の新聞に十萬百萬といふ寄附が見へぬことはない位、時々身代持ちが相續人の無い爲めに幾百萬といふ大金を殘らず遺言寄附をするといふ大口もあるから、勿論費用には困らぬ、公立の療養所が所々に設けられて海濱療養所など云ふものも澤山に出來て居る

ソシテ其處には、自力で養生のならぬ貧民の患者をドシ〳〵收容するのである、病毒の本據たる貧民窟、社會に向て病毒を雨らす病軍の大噴火口ともいふべき貧民患者、是等は猶豫なく一處に集められて、充分の保護治療を加へられる病軍が折角占領した患者の躰軀も、かく療養所に運び去られては、ゼタンに圍まれた風雲兒同樣で手も足も出ぬ、追々と降旗を立つるの外はない

▲八種傳染病豫防の進歩　日本でも衛生上の政事は、進まぬといふ譯ではない、八種傳染病の豫防などは、なか〳〵に進歩して今の處では懸賞論文が云ふた『賢明なる政府熟練なる醫師智識ある國民』といふ程には行かぬが、田舍に行くと隨分に分らずやの人民もあるが、ソレには又相當の利器があつて、巡査先生が足を棒にして馳せ廻るといふと、警察萬能國ともいふべき日本のことじやから、サッサと事は行はれるのである

それで桃山病院の籠城に、一時國民の膽を寒からしめた、猛烈なるペストの侵入軍さへ、容易に喰ひ止めて、山崎の合戰に大閤の本陣に混れ入つた某の如く大學の病院に一匹の病鼠が飛び出し痛く諸博士の荒膽を取つたが、それさへ何事もなく治まつたのも全く衛生の進歩と云つて善い

▲鋭鋒を一轉せよ　三都の避病院も十年前迄は今日の田舍のものゝやうに、避病院は死病院といつたものじや、が此頃ではモー立派なもので中以下のものなら結局避病院に往つたが一層安心と云ふことになつた、八種傳染病に向つては殆んど遺憾がないと云つても差支がない、これからは大軍鋒を轉じて、旗鼓堂々結核征伐の大旆を朝風に飜がへすとしたいものである

處で日本現在の有り樣はドウカと云ふと全るで暗闇である、規律もなければ節制もない、行きあたり次第格鬪して居るからタマラナイ、第一痰でも唾液でも、咯き放しであるから、患者の口より出たもの、即ち病軍に取つて偏强な進擊の機會は、晝夜間斷なく存するのである、前にも既に云つて置いた通り、咯き放された痰や唾液からは、乾くに隨つて細菌が塵埃と共に空中に散らばつて、往來の人を襲擊する、殊に停車場や滝車、馬車中のものは、細菌に取つて毒物たる日光に射られぬから、いつ迄も壯健に生存して塵埃と共に渦まいて旅人の口中鼻孔に闖入するのである、公道や停車場のみでなく、商店の土間であろうが、會堂の板間であろうが、遠慮なく咯き棄てゝ居る

●結核征伐（五八）

佐竹音次郎

○結核に對する日本の現狀

▲シホラシキ患者の心懸　歐羅巴ではどうして居るかと云ふと、アチラでは人々が禮義として又た公德として、痰唾を停車場は勿論大道へ咯き散らすことが少ない、殊に患者は社會の迷惑を察して拔目なく注意するのである、彼の國に游むだものゝ能く知れる如く、公園の共同椅子などに顏色青醒めた弱々しげなる病客が力なき咳嗽と共にポケットを探つて、携帶用痰壺を取出して、その中に咯痰をして又た元の如くポケットに藏めるを見ることがある、是は言ふ迄もなく結核患者の社會に對する心懸である、日本人には情なくも此の一片シホラシキ心懸が少ない

獨り此の心懸けが少ないのみならず、甚だしきに至ると、他人の不幸は搗ふものかナドいふ陋劣下賤な根性さへ懷くものがある、即ちそれが罪惡と知りつゝやつて居る、社會を毒するとは眞にカヨウナ人間を云ふのであらう、それであるから、是丈は是非とも警察令か何かで何人を問はず咯き棄て無用とすることにせねばならぬ大便小便の垂れ流し時代も過ぎ去つた今日、痰の咯きつ放し丈けを保存するには當らぬ、風俗上からも衛生上からも、猶豫なく一般に嚴禁して善いことゝ思ふ

▲食品店と食用器具　次ぎは食用品を商ふ店屋である、鼻汁を拭ふたりする手で以て、小僧が蒸菓子を扱つたり、鮨をイヂクッたりするは殆んど通例じや、殊に驚くのは一家擧つて結核患者であつて、ソレで麵包屋をやつて居るのがある、是等の店で物を買うのは、全るで金を出して毒饅頭を買ふのである、獨逸では警察令で菓子屋でも、麵包屋でも總べて煮返して食せぬ食用品は必ず箸やホークで扱はなければならぬことゝなつて居る、是に背くと乾度罰則に處せられるのである

其外、木箸や小揚枝のやうな口に接する道具で日用注意せねばならぬものでも日本では一向に頓着せぬ、是等の道具は多くは立居も不自由な貧民の徒世とするもので、癩病やみや肺癆患者が細菌狼籍たる其の手で以て拵へることもあるから、なか〳〵に油斷がならぬ、殊に茶の如き卷煙草の如きも製造所に患者を使つて居ぬとも云へぬことじや、全體吾々人類には結核防禦上天から賜つた應援とも云ふべき日光や熱力が自由であるから、遠慮なく使用して晒らしたり沸かしたり殺菌の手段をやらねばならぬ、煎茶の如きも最初の一服丈けでも十分の熱湯を遣ふがよい、卷煙草の如きも必ず一定の吸口を用ひ、牛乳は勿論煮沸して用ひねばならぬ、古着や古本を求めたものは必ず確實に日光に晒らすか熱湯に浸すがよい、これ等は譯もない事であるが、多くの人は何の頓着もない、結核軍は無人の地を長驅するに齊しいのは今日日本の現狀である

▲小學教員の肺病　今迄一つ容易ならぬ危險は小學教員に一々健康診斷をやつた事がある、スルト十人の中に七八人迄は肺に申分のあるものであつたソーナ、成る程、終日塵埃の渦卷く中に立つて、聲を使ひ、氣を使ひ、腦を使ひ、身体迄で使ふことであるから、肺を弱くするのは尤の事である、即ち最も感染し易き機會を作つて居るのであるから、コゝ迄は教員の方の危險であるが其の教員が愈よ結核に罹つたとなると、其の以後は兒童の危險となるのである、此の患者の教員に日々時々取扱はるゝは危險此上ない事である

▲小學教員共濟法　是等は何とか共濟方法を設けねばなるまい、其の方法としては、教員の組合を拵へて新たに採用する場合には、醫師の診斷を經て、ソレが結核患者であつたなら、無論採用を見合せるし、健康なものをば採用すると同時に、共濟組合へ加入させるのである、ソシテ奉職中に結核に罹つたときには、之を會費を以て療養さすることゝする、其の費用は教員各自の月給から幾分を據出させるを本として、市町村費から幾分を補助し、又た幾分を寄附に仰いで行くのである、是は出來ぬ事ではあるまいと思ふ

▲醫師の消毒と病院の隔離室　是迄云つた處は素人の社會である、注意の行屆かぬのも無理はないと云へば云ふのであるが、醫師さへも注意が不行屆であると云ふに至つては、怪しからぬと云はねばならぬ、ナゼかやうに云ふかと云へば、今日醫師の玄關先きや診察所に、痰壺の設けをして消毒を行つて居るものが尙に少ないマサカ醫師として結核の恐るべきを知らぬものもあるまいが、ソレで等閑に付し去るとは聊か呑氣に過ぎまいか、それのみならず、病院で結核患者を取扱ふことが普通患者と何程の差ひもない、肺癆患者を送り出した其室をばロク〳〵消毒もせずに普通患者を迎へ入れるのがないと云へぬ

此の處に入れられた患者は非常の危險である疊のヘダも障子の隅も病菌ダラケであると思はねばならぬ、全体病院には隔離室を設けて、普通患者と取扱を別にせなければならぬ、ソシテ消毒を怠らぬ注意を第一とせねばならぬ、吾々は痰壺の備へてない診察所と隔離室の設けのない病院は、普通患者の訪問すべきものでないと斷言するを憚からぬ

結核征伐（七）

佐竹音次郎

忠部に於ける挽戰格鬪

東京禁厚製

▲結核に侵され易き場合　ソレで、肺病を恐しく思ふ人は、平生痛く攝生といふことに注意せねばならぬ、又た不幸にして既に疾患に罹つたものは、一層注意を要するとで、運命は醫師の善惡よりも醫藥の適否よりも、攝生に多く關するのである、サテ人体の結核に侵され易い場合であつて、人の謹むで注意すべき特別の場合はどうであるかと云ふと

肺炎、肋膜炎に罹りたる時
インフルエンザ、痲疹に罹りたる時
百日咳、氣管支カタル、咽喉カタル等に罹りたる時
塵埃多き屋内に久しく在りたる時
刺戟性の瓦斯又は粉末等を長く吸入したる時

是等の場合は局部の抗抵力が極めて弱くなつて上皮細胞は罅隙だらけであるから、格別に危險である、更に是等の事情が幾つも重なつた場合には、數層の危險であるから、一匹の菌兵をも局部に侵入させぬやうにせねばならぬ、ソシテ是等の疾病の原因は、主もに風邪である霜を踏むて堅氷至るの格で風邪の時は充分の治療を怠つてはならぬ、又た局部のみならず全身に異狀を起して、爲めに榮養の不良、細胞の抗抵力の薄弱を招ぐ場合を擧げると

腸チブス、赤痢、マラリヤ熱を始め其他あらゆる重患の病後
産褥に在る時
房事の度を過ごしたる時
貧血を起こしたる時
大酒せし時
安眠不足の時

体力と精神を過勞せし時其他有ゆる不攝生

是等も續いて危險の場合であるから注意せねばならぬ、ソレカラ、先天的の素因といふがある是れは世俗に云ふ所の肺病の筋であつて、古昔は先天的に肺病を遺傳したものゝ樣に云つたのである、が、是れは考へ違ひで、唯だ其の弱々しい體質を遺傳したのみで、別に病氣を遺傳した譯でないから、自身に心懸て攝生を守ると、肺病にならずと濟むのである、唯だ普通のものよりは一層も二層も感染の早いものと思はねばならぬ

▲結核の病竈　菌兵が既に局部に侵入して、細胞の不完全な所に付け入つたときには、先づ此の處に居を占めて、人身の蛋白質を吸取り、それで己れの生命を保ち油斷なく分裂蕃殖を始めるのである、同類が蕃殖するに隨ひ、ソコに結核病の病竈を作るのである、此の病竈は菌兵の密集點である、根據地である、部落である、彼等は夥たゞしく此の處に屯集して、糧に敵に據るの兵法に從ひ益〻人體の榮養を吸收する、人體攻擊の大利器たる毒素を製造する、ソシテ進取の策を講じて他の部分を進擊して、幾つも病竈を作る、追々病竈の數が增して來ると云ふと數へ切れぬ程になつてマルで肺一面と云ふ有樣になるのである、菌兵の根據地と云へば、可なり大きく思はるれど、實際は罌粟粒位しかないチョット皮膚の出來ものに似た形で、肋膜や腹膜に出來たものを見ると、丁度砂を振り散いたやうである

▲初期全身の恐慌　肺病の初期は此の病竈がチラホラ出來たときであつて、其の刺戟によつて局部に炎症が起こる、炎汁が分泌されて輕度の咳嗽が起る、全身が漸く疲勞を感じて手足に倦怠の氣味が起こる、食氣が減じて來る、皮膚が青白くなる、筋肉が痛せて來る、呼吸の工合がわるくなる、胸の鼓動が激しくなる、少しの運動にも息切がするやうになる、午後になるとソク〳〵寒むけがする、熱が出る、發汗が容易になつて時々寢汗をする、是等の恐慌が起こつた時には局部の細胞は苦戰狼狽の時で、菌兵大得意に愈〻病竈を配布しつゝあるのである

●結核征伐（八）

佐竹音次郎

○患部に於ける接戰格鬪

▲人体の抗拒作用　此の場合には病竈の周圍にある細胞は、毒素の刺戟の爲めに鼎沸の有樣である、即ち局部に炎症を起すので、血管は爲めに膨脹して血球が充滿する、モ一つ言ひ換へれば局部が腫れて來る、スルト、全身には毒素を抗拒するの機能が働らいて、菌兵の攻擊に對抗する、此の時と云ふものは細胞と菌兵が大戰鬪を開らいて勝敗を爭そふ時である、平生身体が强壯で榮養が佳良なる人は、所謂國富み兵强しといふ有樣であるから此等の抗毒作用もなかなかに激しいから、新細胞はドシ〳〵味方の病兵死兵を補充する、血管及び淋巴管は白血球を雲霞の如く輸送して、戰鬪線（即ち細胞と病竈の接着點）に胸壁を築づく、ソシテ、菌兵の侵掠を遮

斷する、此の胸壁は所謂結締織と云ふのであつて、皮膚の火傷が癒へる場合の瘢痕の如く、又た躰中に銃丸が這入つた時に、拔取らずに其の儘局部が治癒する場合の如く、頗る强靭な皮の如きものが周圍に出來て、全く障碍物と人体實質の間を隔離するの作用である、是れが効を奏すると、菌兵の密集點たる病竈は、胸壁の爲めに周圍を遮斷されて、餌道は絶ち切られ、毒素を放散する道も塞がれ、他點へ菌兵を配布する道もなくなる、此處限りに枯死するの外はない此の働らきが身体强壯榮養佳良な患者には善く起るとであつて、一時大に恐慌を起した後にも隨分肺病の治癒するを見るは、主もに此等の作用に因るのである

▲患者に取つての關ヶ原　此場合は患者に取つての關ヶ原であるから、如何に强壯な人でも醫師の指揮を守もつて、身体の榮養を盛にせねばならぬ、是れが局部の戰鬪に何よりの應援である、之に反して不攝生をやつたり、風邪は勿論其他の疾病を起すと云ふと、營養は不良となり新陳代謝は不活潑になる、かう云ふことになると、外敵と激戰の最中に國中に内亂が起つたり糧食や軍需の供給が杜絶を來たしたやうな鹽梅で、局部細胞は全たく戰鬪力を失なひ、敗北に歸するのである、敗北するとドウなるかと云ふと、菌兵は持久的に營養を取つて、ドコ迄も病竈を多くする、幾百千の罌粟粒の集落がアソコにもコヽにも出來るから、其の病竈の間に狹まれた肺の實質は、爲めに榮養を遮斷せられ、細胞は糧道を絶たれて生命を失なひ、腐敗して脱落することになる、スルト肺の各所に米粒大の孔や豆粒程の孔が明く、大きいのは胡桃や鷄卵程の孔が明くことになる、コンナ大きな孔が明くと胸膈外から打診しても分かるのである、尙ほ進むで此の孔が非常に澤山になると、肺臓が全るで蜂巣の如くになるのである、實質が處々脱落して血管のみ殘ると、時々其の血管が破壞する、ソシテ大喀血をするとになる

▲乾酪變性　若しも地体が强壯な患者であつて空氣の極めて清淨な場所で療養をして居ると云ふと、此の脱落する筈の實質が腐敗でなく、乾酪變性といふ一種の變化をするとがある、そふなると細胞の生活機能は失なつても、ジットそこに固まり着いて脱落に至らぬ、此の變化は尙に幸運な經過であつて、それが爲めに病竈が榮養を絶たれる、病竈が他の健全の部分と隔離される、スルト、幾千億萬不測の菌兵が密集した大集落は、一朝窮谷の絶地に陷いつた姿となり、又た砲擊を以て破却した村落の建物が障碍物となつて進軍を沮まれた如く、今一つ比喩を設くれば、モスコーに侵入した拿翁が、大都會の燒失と大雪との爲めに、進退に窮した場合ともなるのである、此は聊か形容に過ぎる嫌があるが兎も角病勢を幾分輕くするは確な事實である

▲腐敗黴菌の闖入　患者自身が黄塵十丈の都會に居つて不潔汚雜な空氣を吸ふと云ふと、空氣中をウロツイて居る腐敗黴菌と云ふ奴があつて肺胞に侵入する、此奴は通例人家の庖厨を襲ひ肉類などに寄生して腐敗を早める奴で、これが一たび肺胞内に侵入すると、菌兵のサン〳〵荒らした部面に落合つて、腐敗作用を始じめるのである、是れは强弱いろ〳〵の奴がある、これを混合傳染と稱へて、極めて不幸なる經過とする、かうなると痰汁には臭氣が出來、痰の色は青黄色になつて來て、痰が全く膿狀になる、治療は最も困難に陷いる、ソレで患者が療養をするには、空氣清淨の地を撰まねばならぬ

結核征伐（十）

佐竹音次郎

最新治術の梗概

▲藥物療法　コッホ氏が結核菌を發見して以來世界の醫學者は痰汁を消毒して、細菌を殺す如くに人体内に在る病菌を殺ろすの目的を以つて防腐劑を服用せしめ又た之が注射等を試みる等專ら此の方面に向て治術の發見に焦心した、是に試用された藥物は擧げて算へられぬ程であるが、就中最も賞用されたものはケレヲソートである、ケレオソートの服用は其の効果として、食氣を進すめ、血色を善くし、氣力を回復し、筋肉を肥やし、咳嗽喀痰を減ずる等、多少著しき効驗を示した處から、之を該藥の殺菌的効力に因るものゝ如くに考へられて居た、シカシ段々血液を檢査して見ると、充分多量に且つ長く服用せしめたものも、血液中には殺菌の効力を奏する丈けの藥分を含むで居らぬのは勿論、病菌の發育を防ぐる丈の藥分をも含むで居らぬといふとが發見された、それでは何故にかく善良の成績を示すかと云ふと、全く該藥の効果として胃腸の醱酵を制止して消化の機能を振興し、榮養を佳良ならしむるの結果であることを證明し

得た、即ち人身の生理的機能を助けて治癒に向はせる迄にして一の强壯療法に外ならぬ譯である、矢張り他の下熱、止汗、祛痰、鎭咳等の對症療法と殆んど伍を同ふするものである

▲ヘトール　其外種々の注射療法も唱道されたが、發明の當時は充分の信用を以て迎へられても實驗の結果が面白からぬ處から、暫時にして世人に忘れられたものが多い、ヘトール注射法の如きは最新の治術として日本でも現に試驗されつゝある、此の法は發見者の言ふ所を以て見るも、血管內に白血球增多症を現はし、病竈の周圍に炎症を起して白血球を竄出し、結締織硬變の作用を以て瘢痕を結ぶに在るのである、病毒の刺戟に因つて、炎症を起し白血球が出て來て結締織硬化を營むと云ふことは、前に述べた處の生理的機能である、本法は人工を以て生理機能を激くして速に効果を收めんとの目的であるから、其の成績の良否好惡は姑らく措きツマリ是も直接に病菌を殺す根治療法ではない

▲ツベルクリンと血精　十年前にコッホ氏がツベルクリンの注射療法を發表して、其の殺菌に効力があると云ふことを唱へた時に、世界は狂喜して之を迎へたのであつたが、今日では殆んど口にするものがない位で、僅かに診斷上の價値のみを存して居る姿である、後五年間氏は再び新ツベルクリンなる者を發表した、是も前法と大同小異の目的を有するものであるが、其の効果は未だ充分世に認められぬ、今も一ツ血精療法といふがある是れも現に試みられて居るが其の成績は未だ確定せぬらしい

▲攝生自强療法　肺癆は勞症或は消耗症を意味して居つて、体力が次第々々に減つていつて、衰弱してしまうと云ふのである、それであるから身体の過勞不攝生等によつて体成分が過度に分解するを拒せき、新陳代謝の平均を保たねばならぬ、食餌を澤山に供給して無くなつた所の体成分の補塡をせねばならぬ、コルチット氏の說に據ると、体成分が消耗すると結核病竈から產出する毒素が、容易すく他の組織內に吸收される、自然の硬結によるの治癒（結締織變硬の塲合）を妨げる、結核菌が周圍に向かつて盛に擴がることゝなる、と、かう云つてある、病竈に向つて白血球や体細胞が、生存競爭をすると云ふのは前にも述べた通りの次第であるから、体成分の消耗が此の戰鬪に不利なことは云ふ迄もない、それじやから肺癆患者の營養を佳良にすると云ふのは、只だ對症的の療法といふ而已でなく、直接に血液成分を良好にし体細胞の抵抗力を强大にして結核菌を撲滅するのであつて、攝生自强療法といふことは充分に治癒の意味をも持つて居る今日の處では先づ根治療法に近しと言つて差支がない

▲榮養療法

（一）滋養物の多食　注意して食物を選定してなるべく多量に食すべし

（二）混食の注意　蛋白質脂肪に富める滋養品と稱するものを多食して身体の消耗を補ふに努むべしと雖も亦た穀類野菜の類を混用して消化と吸收を良くせんことを努むべし

（三）榮食の緊要　單に肉類或は鷄卵牛乳等を以つて榮養物と而己心得へ野菜類を度外視するは甚だ不可なり、遠洋航海者が榮食缺乏の爲めに体質に異狀を來たし容易ならぬ疾病を起すことあるを見て知るべし

（四）偏食の害　偏食の爲めに益〻消化吸收を害し羸瘦を重ぬるもの一朝混食を用ゐるの故を以て消化の機能を回復する事は吾人の往々見る所なり

（五）脂肪食　患者の身体は脂肪の減ずる者故鷄肉牛肉豚肉等の脂肪多きものを用ゐること正當なり、魚肉は燒肉刺身等を宜しとす但し肉食には必ず浸し物、大根オロシ等を副へ用ふべし

（六）主食　米飯、麵包食等は勿論主食として用ゆべく亦た味噌汁等の類を加用せざるべからず

（七）調理法の注意　患者は多量の食物を要するを以て調理の配合を種々に工夫し美味にして變化あるを貴ぶ美味なるも變化なければ嫌厭を來し遂に消化吸收に害あるに至るべし

（八）菓實の必要　菓實を食するも亦た有効の食餌にして就中葡萄を最も佳とす、西洋には葡萄療法といふものすらあり

（九）時間の一定　食事は度數と時間とを一定し間食せざるを要す即ち一日三回乃至五六回を限りとし取捨は醫師の指揮に從ふべし

（十）適宜運動の必用　兩食の間には必らず適宜の運動を爲すべく運動の過度は宜しからざる故是亦た醫師の指揮に因るべし

（十一）食慾不振　胃腸に故障無くして食事を倦厭するものあり、是を心經的の食慾不振といふ、此の如きものは努めて食することを練習すれば奏功を得べし

結核征伐（十二）

佐竹音次郎

○結論

▲醫師の誠意と才能　現時の肺癆治療法は大抵上の如くであるが、藥餌療法が出來ても榮養療法がなければならず、是等が充分でも、惡るい空氣の中に居つたり、精神を勞したり或は鬱屈沮喪して居つてはならぬ、ツマリ是等の治療法は相助け相補なつて此の肺癆といふ重患を死から救ひ出すのである、それじやから醫師の親切な注意を要することは勿論で、食餌療法の如き如何に厚味の滋養品を與ふるも、調理が拙劣で變化がなければ、忽ちに厭氣になつては多量に食することは勿論出來ず、假令之を食しても充分の榮養とはならぬ、それで醫師は患者の爲めに、時としては献立人ともなり、又た料理人ともならねばならぬ、精密な食餌箋を作つて與ふる程にせねばならぬ、單に甘いものを澤山食つて、牛乳もタント呑み、努めて運動なさい位の言葉而已では、患者に取つて何の効もないのである

▲不治の病と爲せし弊　肺癆は其の初期からして既に重患であることを知らねばならぬ、一朝其の疑がひの自から起つた時には、速かに醫師の診察を請ふて適法の養生に取かゝらねばならぬ、此の如くにして充分の注意を以て間斷なく養生を續けたならば、決して回復すべからざるの病でない、只た養生に着手する時日の遲延したる爲めに、幾增倍の困難を加へて終に救ふべからざるを常とするのである、世間の患者大體は其の初めから心付かず、體力大に困憊するとゝなつて、漸く醫師の診察を請ける場合が多いのである

處で古來肺癆といふと不治の病となつて居つた爲めに、今日に至つても醫師も患者も充分治癒すべしといふの確信がない、肺癆じやと診察されると、死の宣告を受けた如く思ひ、診斷する醫師も死の宣告の積である、故に醫師が患者の失望を思ひ遣つて、明らさまに患者に告げないで其の實、肺癆の治療をすると云ふと、患者は漸く心付いて醫師に尋ねる、醫師は尙其の實を曖昧にする、スルト患者は醫師を疑つて、他の醫師に診察を求むる、他の醫師も亦た之と同樣であると、更らに又た他の醫師に往くので、終に病院廻りをして居るうち、肺癆ではないとの診斷を得て强いて安心を求めんとする有樣である、是れが現今の一大弊害であるが、其の本を糺せば、肺癆を不治の病とするから起つたことである

▲斷然交際を避けよ　それで肺癆に罹りたるものは勿論、少くも肺に異狀がある時、即ち肺炎カタル等の兆候ある時は、醫師は充分に患者に注意を與へ、患者は直ちに療養に着手せねばならぬ、第一世間の煩累と光陰を取つて之を一擲に付し去るべしである、斷然交際を避くるは勿論職業をも擲ち、轉地療養は此の場合に最も適當である、煩累と光陰を一擲に付するとは、其の實甚だ行ひ難い事ではあれど、患者は死を避くるの價として此の困難を拂はねばならぬ

▲人間酸鼻の極　肺癆の殊に悲慘なるは、家族迭ひに相感染して長日月の間一家を不幸の淵に沈むるに在るのである、それで一家内でも可成病室を隔離して、看護人は其の姑息なる感情に拘泥せず、嚴重に消毒の手續を行はねばならぬのに、或は父子夫婦の至情より、危險と知りつつ之を忽かせにして顧みず、却て注意の周到なるは瀕死の尊屬に事へるの情に欠くるかの如くに思惟するものが多い、是等は其尊屬に對し祖先に對する此の上ない心得違ひではあるまいか若し其の尊屬なる患者が、歩一歩死に向かひつつあるが爲めに、最早や妻たり子たるものゝ危險をさへ慮かるの餘裕なく、一家を擧げて已れの犧牲となるのも憂へぬといふに至つたならば尙に人其物の意思の薄弱な事を三歎せねばならぬ、世には父たるものゝ一憩處を避けん爲めに感染の危險を冒かして、可惜一家の後嗣を失ふもあり、甚だしきは主人の一喝を恐るゝが爲めに、大患を脊負つて家郷に還るの婢女あるに至つては、人間酸鼻の極である、是等は世の該疾患に惱みつゝあるものゝ三たび意を致さねばならぬ所であらう、否な家長たるものゝ常に心得居べきことである

▲治癒の一大要訣　是等の陋態に陷いるのみならず、到底回復の望みがないものと斷念するといふと、自暴自棄の心を起こして、却て益々邪侈淫逸を縱にし、其の身体を凌虐し遂に死の免がるべからざるに至りて焦躁煩悶見苦しき死を遂ぐるは、尙に言ひ甲斐のない限りである

故に患者は前にも述べた如く、平素心を名利の念に絶ち、天然に結び付くるの工夫を爲して、園藝に、詠歌に、罪なき娯樂を求めて、天地間の一閑民と自認し、心等閑に光陰を送るの覺悟がなければならぬ、此の工夫を以て靜かに歳月を經過すれば、陋劣なる嗜好や汚穢なる情慾は、漸く人心を離れて心性は追々純潔となり、趣味は段々高尚となるのである

萬一不幸にして惡經過を取つたとしても、死に至るまで慌てず躁がず一定常度の攝生を格守するといふ大勇猛心を失つてはならぬ、斯く工夫しつゝ進むときは、假令ひ身体は壞敗の時となつて心其の物は幾多の健康者よりも一層完全な神々しい理想的のものとなることが出來る、是等の工夫は一個の人物として死期を正大にする所以であるが、獨りかゝる心的操守の結果に止まらず、此の一大工夫が出來た爲めに頽勢を挽回して、さしもの重患が輕快に趣むいた例は屢屢あるこである、ソレデ此の崇高なる心的工夫男らしき覺悟、勇猛なる克己心は疾病其物の療養の工夫としても亦た極めて價値ある要訣とするのである(完)

家庭の園藝（二）

草花類培養法　宿根草花

▲牡丹　は毛茛科に屬する植物で和名フカミ草一名ハツカ草、テリサキ草漢名を丹皮、富貴花洛陽花、などと唱へて日本に初めて來たのは玄同放言によると延喜、天暦の頃に渤海國から來たから和名を渤海草と言つたので又白氏牡丹芳に花開花落二十日、一城之人皆如狂と云ふことがあり又詞花集定道公の歌に「咲きしより散り果つるまで見し程に花のもとにてはつか經にけり」と云ふのがある二十日草の名稱も大方此の邊から起つたとのことであろう、扨て之れを植えるには通例秋の彼岸頃に分栽して水肥をやり翌春更らに油粕類をやれば美大な花を開くのであるが實蒔をするために種子を收めようとする場合の外は可成落花後に莖を截つて實は決して結ばせるものではない、又可成花を大輪に咲かせようとするにはまだ花の開かぬ内に其蕾の半數丈けは摘み取つて仕舞ふのが肝要で例へば一株に十個の蕾があるものとすれば一枝に付一蕾を殘すようにして一株から五個の蕾を摘み取るのである接木をするには八月から一月頃迄の内に切接若くは根接法を行ふのであるが何れにしても接部を少し固く縛つて圃地に畔高く植えて殆んど接穗の見へぬ迄に土を掩ふて更らに其上に空鉢を掩ふて置くのである、土質は濕地を嫌ふから可成高燥な土地を選ぶのが必要だ、種類は秘傳花鏡に百三十餘種群芳集に百八十三種を載せてあるが目下本邦には千餘種もある其内の二三種を擧げて見ると

新神樂（獅子咲大輪萬重）　富士嶽（純白大々輪）
阿房宮（純紅四五邊抱咲）　常盤津（淡紅白覆輪極大輪）
白幡龍（極雪白重咲大輪）　東錦（赤地白條覆輪）

▲芍藥　此の植物は以前は主に野生のものを藥用にのみ用ゐて居つて花の方は賞觀せなかつたものであるが今日では園用として到る所に栽培せられる樣になつたので從て種類も隨分多く中には牡丹をも欺く樣な優品も間々ある之れは普通落花後又は秋の彼岸頃に移植して翌春開花前迄に數回肥料をやれば美大な花を開くので尚ほ大輪の花を咲かせようとするには牡丹の樣に蕾の内に其幾分を摘み取つて仕舞ふのが肝要である又た實蒔をするには七八月の頃實の熟したと

きに凡そ一二寸の深さに蒔て切藁の類を掩ふて置て翌春發芽後親株の樣に培養すれば三年目から開花する土質は砂壤土を良しとするのである（古谷生）

越年草花類

▲カンパスラ　之れは夏から秋にかけて紅、白紫などの大形の鐘狀の花を開く桔梗科の植物で種子は春秋の彼岸頃に床蒔地に蒔て發芽後花壇又は鉢植にするのであるが此のものは唯だ花形の稍や奇なる計りで餘り優美な花ではない繁殖法は種子の外春期に根分法を行ふので土質は砂壤土を宜しとするのである之れには宿根の外に一年生の奴がある

▲罌粟　之れは罌粟科の植物で種子は秋の彼岸に定所に蒔て發芽後弱い苗を間引き丈夫な苗だけを殘し開花前迄に一二回も肥料を與へれば初夏の頃には三尺位に伸びて紅、白、緋、赤絞りなどの單瓣又は重瓣の美大な花を開くので一体此のものは移植を嫌ふから初めから鉢又は花壇に下種するのであるが花期が短いので切り花としては不適當なるものである

▲美人艸　之れは前の罌粟と同科の植物で唯花容單姿共前種よりは小さい計りで培養法は前種と變らない

▲金盞花　之れは菊科に屬する植物で秋の彼岸頃に床蒔にして翌春花壇又は鉢植にすれば五月の頃には一尺位に伸びて黄又は橙色の單瓣若くは重瓣の花を開くのであるが春蒔にすれば八九月の頃に開花するだから春秋二度に種子を蒔けば初夏の頃から秋の終り迄で絶へず花を開かせることが出來るのみならず此のものは元來花期が至つて永いから花壇又は鉢植の外切り花には至極重寶なものである

▲ナスターチューム　之れは俗に金蓮花とも云ふ奴で裝飾用として溫室内とか又は垣とか家の柄などに纏絡させるもので又矮生の奴は盆栽として賞觀に供するも良い種子は秋の彼岸に蒔て發芽後一二回も肥料をやれば五六月の頃から紅樺、黄、絞り等の香氣ある奇形な花を開くのである

▲マシヨラ　之れは俗に紫羅蘭花とも云ふ十字科の植物で種子は秋の彼岸に床蒔にして翌春生長後鉢又は花壇に移植すれば四五月頃には丈け四五寸から一尺位に伸びて紅又は白の單瓣の花を開くのであるが一種香紫羅蘭花と云つて極めて香氣の好い稀、黄、白、紅等の單瓣又は重瓣の花を開く種類がある種子は早春又は秋の彼岸頃に蒔て一寸位にも伸びたときに移植して一二回水肥をやれば佳香ある優美な花を開くので之れは他の「フリージャ」「ヒヤシント」「ヘリオトロープ」「ニホヒスミレ」などの有香草花と共に花壇鉢植切り花等の外に夜會用の花束には至極適好なるものである

▲水仙翁　之れは極めて丈夫なる石竹科の植物で種子は秋の彼岸頃床蒔にして翌春花壇又たは鉢に移植すれば夏より秋にかけて多くの花梢を出して鮮紅色の花を開くので切り花としては適當なものであるが莖葉共に灰で塗れた樣に白色の毛茸を被むつて穢汚く見へるのは缺點と云ふべしだ

▲美女撫子　之れも矢張り石竹科のもので種子は秋の彼岸床地に蒔て翌春一寸位に伸びたときに花壇又は鉢に移植すれば五月頃には一尺位に伸びて紅、白、黄、絞りなどの美しき花を開くので切り花に最も適當なるものである

▲蕣花　朝顔と云へば艶陽四月花笑ひ鳥謠ふ一年中の好期節も莫なく過ぎて野に山に到る處青葉の影が多くなつて朝風の身に涼しさを覺へる頃から露の雛に嬌姚たる花を開くので其濃淡嬌羞の笑を含んで籬間に點綴せる樣は宛がら仙媛の爭ひ舞ふが如しであるで此の頃になると春眠は愚ろか四季曉を覺へざる寢坊助迄が絶無の早起きをして東天の白らみ初める頃から入谷に押し寄せるので其處には鉢に仕立てた朝顔の外に細工物を見せる之れは言ふ迄もなく隨分俗なものであるが人の心は樣々なもので斯んな馬鹿げたものでも相應に見る奴があるそうな

此の蕣花は一名朝な草又た鶯草、漢名を牽牛花と云ふ旋花科の植物で平城、平安の頃支那から來たとのことで其時分には唯淺黄、紅、白の三種のみであつたので彼の姜白石の詩に青花綠葉上疎籬、嫋々長條竹尾垂、とあるも多分は此の淺黄の花を詠んだのであろうが兎に角之れが日本に來てからと云ふものは大層流行した勿論其間には幾度かの衰運にも逢つたが併し熱心な栽培家が一番珍無類な奴を出して世人の鼻を明かしてやろうと云ふことからして遂に今日の樣に大

輪咲とか變り物など數百種を出す樣になつたので之れが栽培法は大輪咲を作るには先づ四月の中旬頃南面の日當のよい場所を撰んで幅三尺長さ適宜の地を劃して土を篩に通し細かにした上で夫れに化熟した油粕汁又は堆肥の少許を施して其上を細かい土で被て撒て夫れに種子を蒔き更らに其上に種子の隱れる迄細微土を掛けて灌水後切藁を敷て床地の乾燥したり又は雨のため種子の曝露するを防ひで置けば一週間位で發芽するからして更らに本葉二三葉も出たときに鉢に移植するのであるが夫れに用ふべき土は溝泥の乾いた奴に同量の砂を混せたのを選ぶのである先づ最初鉢の下部には排水を良くするために極めて細かい礫を入れて其上に前の混和土を盛つて夫れに苗を植えて活着する迄二三日間は可成陽光を遮つて活着後漸次日當に出すので肥料は度々油粕汁の化熟したものを與へ又た灌水は初めは日中に一回中頃に二回開花の盛り時になると三回宛所謂ひなた水を與へるとである、夫れから蔓が出るようになれば夫れに支柱を立て本葉五六枚のときに心を摘むすると本莖の傍から葉腋毎に花蕾の付た二三の枝が出るからして其蕾も可成一つ置きに摘み取つて仕舞ふので又初めから終り迄絶へず大輪に咲かせるには花が咲たならば必ず其日の中に摘み取つて種子は決して結ばせるものではない、夫れから變り物を作るには種子を床地に蒔かずに初めから鉢蒔にするので元來變り物を作ると云ふことは早く言へば勢力を弱めて不具なものを養ふのが主意で其種子は發芽力が弱い不完全なものであるからして大輪咲よりは遲く五月の中頃に播く夫れに用ふる土は殆んど無肥料の砂土を撰ぶので注水とか摘斷法は大輪咲と同樣であるが肥料は可成多量に施さゞるを良しとするのである

夫れから一種畑作りと云つて床場で養つた苗を二三葉のときに一株二三本宛寄せて根の周圍に土を鬲子の樣に付けて畑地に移植して活着後一通り肥料を與へて更らに二葉も出たときに前に付けた土の團子の部分を更らに大きくして移植すると云ふ風に活着させては移植して何時鉢に移しても差支ない樣に苗を馴らして置て花が咲き初めてから其善惡によつて鉢に移す方法がある之れは繰日に出る植木師が雜花を多く作る場合に行ふ方法で上品な花を培養する人の爲す可きことではない

夫れから種子を採ることであるか一體變り物即ち牡丹咲類の花には決して種子が實らないだから種子を採るには別に圃地に親木とも云ふ可き苗を作るので其處に一種に付て十粒位の種子を蒔くすると其内の數本乃至悉くが固有の牡丹性の花を開かないで普通の花を開く牡丹性の種子は之れから採るので苟も牡丹咲の性を持つて居る種子は連年栽培して居るうちには必ず其花を開くからして其積りで培養せなければならぬ

▲シチラリヤ　之れは普通四五月の頃紅、白、藍紫、赤、などの單色又たは複輪の美麗な花を開くので之れを作るには通例七八月の頃に床地を丁寧に整へて夫れに播種するので一体此の種子は容易に發芽し難きものであるからして種子を播た後には土を掩はずに細かに刻んだ切藁を薄く敷くか又は風雨のために種子の飛散を防ぐために掩ひをするのが肝要で又乾燥した場合には水を與へて發芽後四五葉も出たならば園地に移植するのであるが鉢植にする場合には數回移植を行つて可成短太で丈夫な苗を養ふので冬間は南面の温かい場所に置けば四五月頃から開花する之れは外國では主に温室又は硝子框の温床に入れて寒中開花させるために栽培されるので土質は肥沃な壤土を最も良しとするのである

▲イベリス　之れは歐洲の南部及び亞細亞の西部が原産地で栽培の容易なる十字科の植物である種子は三四月頃床地に播て發芽後花壇又は鉢に移植して開花前迄に一二回肥培すれば七八月頃に五寸から一尺位にも伸びて白、赤、紫又は混りの多數の美花を開くので春期に開花せしめるには秋蒔にするのである土質は空氣の流通や日光の當りさへよければ普通の園土にも能く生育するのであるが就中砂壤土を好むのである

▲鶏冠草（ケイトウ）　之れは夏月二三尺にも伸びて梢頭に鶏冠狀の花梗を出して赤、白、黄などの無數の小花を開くので之れには一種鎗鶏冠と云つて鎗狀の花梗に無數の小花を付けるもの又枝垂れ鶏冠と云つて毬狀の花梗の枝垂れた奴とか又は毬鶏冠と云つて毬狀のもの其外筆鶏冠（フデケイトウ）、矮鶏冠（チヤボケイトウ）、十樣錦（ジユウヤウニシキ）抔の變種があるが何れも種子は春の彼岸頃床蒔にして其上に切り藁を掩ふ發芽後四五葉も出た時に園地に移植して活着后一二回肥料をやれば能

く生育するのだ栽培の至て容易なものである

▲千日紅　之れも前種と同じ莧科の植物で普通八九月頃丈け一尺位に伸びて莖頭に赤又は白の球狀の花を開くので花壇の外切り花によい培養法は鷄冠と同樣だ

▲フロックス　之れは花容草姿共に夾竹桃に似て居るので一名草夾竹桃とも云つて普通五六月頃から七八月にかけて白、紅、紫、赤、藍絞り等の優美な花を開くので之れに一種スターフロックスと云つて花形の星形の奴がある種子は春の四月頃園地に蒔て苗の一寸位にも伸びたときは丈夫な苗を殘し弱い苗を間引て五六寸の距離を與へ開花前迄に一二回肥培すれば七八月頃迄には一尺計りに伸びて多くの花を開く之れは花壇の外切り花によい

▲ルービン　之れは主に家畜の飼料に供する莧科植物であるが又園用して賞美する價値は充分ある種子は四月頃鉢又は園地に蒔て一回移植すれば七八月の頃木犀樣の佳香ある黃、紅、藍白などの穗狀の花を開くのであるが秋蒔にすれば越年して初夏の頃に開花する

▲翠菊　之れは菊科のもので在來のものは赤白紫の三種しかないのであるが外國から舶來したものには此の外に絞りとか黃とか藍とかがあつて瓣に單瓣、重瓣花形に普通咲と毬咲などあつて夫れに長生、矮生の二種がある種子は四月床地に蒔て四五葉のとき園地か又は鉢に移植すれば八九月頃に開花するが秋蒔けば越年して六七月に開く之れは花壇又は切り花の外矮生のもの盆養して賞觀せられる値がある

▲美女櫻　之は普通五六月から紅、赤、白、紫絞り、黃などの櫻の花に似た無數の小花が寄り集まつて開くので隨分美しいものである種子は秋の彼岸に蒔て翌春花壇又は鉢に移植するがよい

▲ヘリアンサス　之れは俗に向日葵とも云ふ菊科の植物で賞花用の外種子は家禽の飼料に用い莖からは纖維を取ることが出來るのであるが又獨逸の某學者の說によると此の種子から得た油は調理用の外石油の代用にもなるとのことである之れには長生と矮生夫れから單瓣重瓣の二種があつて種子は春の彼岸床地に蒔て二寸位も伸びたときに定地に移植して數回肥料を與へれば夏から秋迄黃又は橙黃色の偉大な花を開くので歐米には此の外に白花のものがあるソーナ

▲ジンニヤ　之れは俗に浦島草又は百日草とも云ふ菊科に屬する植物で春季に種子を床地に蒔て一二寸に生長したときに鉢又は園地に移植すれば七月頃から降霜の頃迄黃、赤、白樺、絞等の重瓣及び單瓣の花を開くので花期が永く切り花によい併し在來のものは花形が一般に小さいが舶來のものには秋菊大の花を開くのである

▲松葉牡丹　之れは御承知の通り夏月黄、白、樺赤、緋、絞、紫等の單重兩瓣の花を開く馬齒莧科のものであつて種子は春彼岸の頃一度蒔て置けば次年からは別に採收貯藏した種子を蒔かずとも自然に落下した奴が發芽生育するので之れは花壇の縁植、邸園の道傍、敷石の傍らに栽植すれば花期になると丸で彩氈を敷きたらんかの如く又一層の眺めである

▲ペチユニヤ　之れは夏より秋にかけて緋、赤紫、白、絞り色の朝貌に似た重瓣又は單瓣の花を開く茄科植物で花の大さは大きいのになると直徑五吋からもある種子は秋彼岸頃床蒔にして翌春鉢に移植すべしである

▲ダチユラー　之れは性質が丈夫で栽培容易なる裝飾用植物で夏月佳香ある白、紫、黄等の一重又は八重の口徑八吋長さ五吋もある奇形な花を開くのである種子は四月頃床播にして發芽後鉢又は花壇に移植するのであるが又挿木をするには新枝の六寸位にも伸びたときに砂地に挿して絶へず適宜の濕氣を與へて置けば容易く活着するので土質は砂壤土に最も能く生育するのである

草花類栽培法終

三月の園藝

（桃、韮、ヒヤシント及播種、移植等）

桃は一名三千代草、酒古草とも稱へて支那では之れを仙木と云つて五木の精なる故邪氣を去り百鬼を制するものと云ひ傳へて日本を初め歐米共に昔から栽培せられたものだが其原產地は西說では一般に波斯國であると思はれて居るけれどもデ・カンドル氏によると此の桃なるもの、故郷は波斯ではなくして多分支那國であるとのことで此の疑問は同氏の著はした植學地理 Geographie Botanique 及植物栽培原論 (L'origin Des Plantes Cultivees.) なる書物に充分說明せられてあるので英國では十六世紀の中頃から栽培せられたとのことで日本のものは固有のものであるか或は他から移植せられたものであるかと云ふことは遺憾乍ら記錄の徵すべきものがないから解らないが兎に角之れが栽培は古くから行はれたもので桃林の有名なるものは京都伏見及び大坂天王寺などであつて其他東京近在到る處に作られて居るが本邦在來のものは肉よりも種子の方が大きく其上香氣がなく味がまずい處が外國種の物になると皮が薄く肉が柔かで併も形が大きく風味の佳良なることは本邦種の桃などが比較に出た所でとても取組にならぬだから果物は桃に限るとは一般歐人の云ふ所であつて之れは強ち無理からぬことであろうと思ふ

偖諺に桃栗三年柿八年と云つて桃は果實中では早く結果るものであるが其代り老衰も亦早い早熟早老なものであつてをけに至つて樹脂を生じ易い此の樹脂を防ぐには落花後又は秋の彼岸に地上一二尺の處を縱に幾條も傷を付けるか左もなければ一部分の樹皮を剝げば其傷口から樹脂が出で樹の衰弱を妨ぐことが出來るので欽定授時通考にも「性早實。三年便結子。五年即老。結子便細。十年必死。以皮緊也。若四年後。用刀自樹本竪剝其皮。至生枝處。使膠盡出。則多活數年」とあり又群芳譜に「凡種桃淺則出。深則不生。故其根淺。不耐旱而易枯。近得老圃所傳云。於初結實。次年斫去其樹。復生又斫。又生。但覺生孤即斫令復長。則其根入地深而盤結固。百年猶結實如初。」とある此の桃には種類が甚だ多く花の見るべきものと實の賞ずべきものあつて彼れ之れ六七十種もあるが從來本邦では熟期によつて夏桃、秋桃、冬桃の三種に分ける夏桃は離核即ち種子と肉が容易く分離することが出來るが秋桃寒桃になると何れも粘核で肉が種子に附て離れざるもので本邦人は一般に離核で種子に近い部分の肉が深紅色を帶びたものでさへあれば其皮の厚い位には頓着しないで歡迎されるのであるが外人は之れと反對で其色の如何に關らず香氣が良くして皮の薄い奴が御氣に入るのであるソーナ

夫れから此の桃の繁殖法は李、杏、巴旦杏、實生桃などを砧木として接木を行ふので其内杏砧に接だものは樹脂が少なく實が大きく味も亦佳良であるが桃砧に接ぐものは樹脂が多く出る患がある土質は砂交り眞土又は砂礫地を良しとするので有機質に富んだ肥沃な土地は樹の命數が短かく樹脂が多く出で美果を產することが出來ない又上層の深き乾燥地又は上層淺き冷地などは桃の培養に不適當であるが止むを得ずして之れ等の地に植ゑる場合には巴旦杏又は李砧に接だ奴を攫べば枝の徒長することがなく樹の命數が永く美果を產することである桃のことは先づ此邊で話を止めて置て次に本月開花すべき二三の草花を擧げるとしよー

蕓菜　之れは和名須美禮又都保須美禮一名一夜草、二夜草、（莫傳抄）紫花地丁、前頭草（以上網目）などゝ唱へて長葉と丸葉があつて萬葉第八に「山振咲有野邊都保須美禮」とあるのは丸葉の奴を詠んだものであつて都保とは圓の大臣又圓江などゝ同じく圓の字のことであるが兎に角此のものは日本には到る處に自生の奴があつて花は主に濃紫色又は淡紫色のもので外國にも此の野生のものが百餘種もある其内六十種は寒帶地方三十種は南亞米利加二種は亞弗利加八種は濠太利、及ニユージーランド等に見出されるのである併し園用として一般に栽培せられるのは香菫と云つて紫、白、黃、紅等の一重又は八重の芳香ある大形の花を開く種類である繁殖法は種子及び根分けの外に親株から出る匍匐莖を分植するので種子は春期に床地に蒔て發芽後一二回移植して活着後時々肥料を與へて秋期に鉢植にすれば翌春開花するのであるが併し此れは元來濕なる土地を好むからして可成乾燥せない樣に根元に水苔の類を敷て水分を保たしむるのが肝要である

ヒヤシント　之れは喜望峯元產の百合科植物であつて普通三月頃紫、紅、白、緋、碧色などの

佳香ある單、重瓣の花を開くので培養法は秋期になつて土地を耕して堆肥、油粕類を施して夫れに五六寸の距離に兼て貯藏して置た球根を一球宛植えて冬間は藁類を被ふて寒を防ぎ又鉢植なれば肥沃な砂壤土を盛つた鉢に植えて春開花前に一回肥料を與へれば美大な花を開くので落花後は葉の黄ばんだときに球根を堀り上げて一旦乾燥せしめて砂中に貯藏すべしである

播種　金盞花、美女撫子、八車草、鷄冠草、小町櫻、日々草、鳳仙花、金雀花、翠菊、月見草向日葵、十様錦、亞米利加白鮮、桔梗、茄瓜、松杉、檜、櫻櫚、椎、金松、茶、桐、枳殻、グロキシニヤ、アブチロン、ジリヤ、ロベリヤ、フロックス、アスター、パートニヤ、ヘリアントース、リナリヤ、廿日大根、ロールラビー、萵苣、龜井戸大根、鶯菜、玉葱、菠薐草、蕃茄、早生胡瓜及茄子、春大根、紫蘇等を播くので苟も移植を忌まざるものなれば其蔬菜たると草花たるとを問はず先づ初めに床地に種子を下して其處で苗を仕立て、後に定地に移植するので夫れには南面日當りよき場所を撰んで其土地を淺く耕し底土を堅く踏み付けて其上に細かに篩つた土を掛け元肥を施して更に其上に細微土を掛いて夫れに種子を蒔き薄く土を掩ふべしであるが併し又物によつては單に種子の上を土で掩ふた許りでは滿足しないで尚其上に切り藁又は籾殻左もなければ馬屎の乾燥紛碎した奴を掩ふと云ふ御念の入つた方法もある之れは風雨のために大事な種子が飛び出したり又は床地の乾燥に過ぎるのを防ぐ目的であつて種子の極めて細かい奴は土を掩はずして板で以て輕く押し付けて後に切藁を敷くのである併し何れにしても發芽したならばモー切藁又は籾殻には用はないのであるから此の際永の暇を遣ッて發芽後床地の乾燥したるときには水を與へ苗の二三葉乃至五六葉も出たときに定地に移植するのである夫れから蔬菜類の茄子、胡瓜、蕃茄の樣なものを此の月に播くには溫暖なる場所に幅四尺長さ一間乃至二間位の地を劃して少しく中高に深さ一尺五寸位に堀ッて夫れに馬屎三分、木葉一分を混じたものを厚さ五寸から七八寸位に盛つて其上を堅く踏み付けて後に沃土を五六寸も篩ひ掛けて周圍を藁又は厚板でかこひ夫れに種子を蒔き薄く土を掩ふて其上に藁を敷いて溫かに保ち雨天又は夜間には莚類を掩ひ寒さを防ぎて置けば一週間か十日位も經れば發芽するからして發芽後は日中は陽天に當てるのが肝要で斯して播いたものは五月頃には畑地に本植すべき苗となるのである

◎移植　福壽草、秋牡丹、金蓮花、撫子、溪孫花菖蒲、鳶尾、紫菀、百合萩、繡花、蕎草、香蕙、美人蕉、棣棠、海棠、佛見笑、紫陽花、杜鵑花、紫荆、紫葵、薔薇、櫻、朱萸、松、杉檜、櫻櫚、木瓜、石榴、落葉松、百日紅、柑橘類、葡萄、李、杏、桃、柿等で一體植物を移植するには落葉樹なれば春發芽前又は秋落葉後常葉樹は五六月の頃を好期とするので先づ植ゆべき場所を中高に堀つて其處に植物を移し周圍に土を掛けて少しく苗木を搖り動かして根と土とを定着せしめて土を根際に小高く盛つて其上を堅く壓し付けるので若し土地が甚だしく濕潤であつたならば過度の水分のために根の腐敗する患があるからして可成高位置に植えるのが肝要である夫れから移植の際には幾ら丁寧に堀つても多少根を損傷するから此の場合には鋭利な小刀で局部を滑らかに削ると云ふ外科手術をやるか又は泥土で以て患部に繃帶を施すので若し此の法を怠つたならば傷口から腐敗を來して死で仕舞ふか或はよし命を拾つたにしても之れがために充分の發育を遂げぬ樣になるだから無心の草木だからと云つても之れを養ふ以上は之れ位の面倒は見てやらねばならぬ又草花類の苗を移植する場合には可成雨前又は雨後二三日も經て表土の稍や乾燥したときに移植して數日間は日掩をして日光の直射を防いで置けば四五日にして能く活着するので給水は土地の乾燥せざる限りは活着後に施すことである

◎分栽　花菖蒲、百合、福壽草、紫菀、撫子、秋牡丹、桔梗、紫荆、迎春花、芭蕉、美人蕉、金蓮花、鳶尾、蕺蓀、菫菜、菊、石榴、辛夷、玫瑰、剪夏羅等

◎接木　薔薇、木瓜、天女花、南天、繡花、躑躅、椿、木蘭、杜仲、枇杷、臘梅、瑞香、山茶花、迎春花、梅、桃、櫻、海棠、李、杏、柿、栗

閲覧室

葡萄等

◎挿木　錦帶、萩、椿、杜仲、狹竹桃、薔薇、連翹、芙蓉、牡丹、迎春花、木犀、葡萄、梅、柿無花果、梨等

接木をするに當て注意すべきことは(一)砧木とすべき植物は接穗と同科の植物で併も同屬同類のものを撰ぶこと(二)砧及穗を切るに用ふる刄物は可成鋭利な小刀で面を平滑に削つて双方の亞皮部を密に接着すること(三)穗に用ふべき枝は母樹の南面中位にある前年發生した若枝の勢力の中等なるものを選ぶこと等であつて砧木と穗とは可成同大のものか左もなければ接穗よりも砧木の方大なるを選ぶので此の場合には接穗を砧木の削り口の左右何れかの一方に片寄せて穗と砧との亞皮部を密に相接着せしめることである(古竹生)